

彦根教育 学びの提言「ひこねっこ こころそだての6か条」について

彦根市教育委員会

1 趣旨

変化が激しく複雑化・多様化する社会において、子どもたちは、様々な変化に積極的に向き合い、自ら考え判断し、また他者と協働して課題を解決していく力が求められています。また、「人生 100 年」と言われる時代を生きていくためには、時代の変化に柔軟に対応できるよう、学び続けていく力を身に付けていくことも必要です。

こうした状況を踏まえ、彦根市教育委員会では、学習指導要領に示された学力の三要素「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」とともに、その土台となる「非認知能力」の育成が重要であると考え、「非認知能力」を含めた「生きる力」としての「総合的な学力」の向上を目指しています。

そこで、これからの時代を生きるうえで重要な「非認知能力」を、子どもたちが身に付けるために「ひこねっこ こころそだての6か条」を提言し、学校・園等と家庭・地域が一体となった取組を推進していきたいと考えます。

2 非認知能力について

非認知能力：3つの能力（目標の達成、他者との協働、情動の制御）とそれぞれの能力を構成する要素

○目標の達成：目標を達成するための力

- ・忍耐力：自分の欲求や衝動を我慢できる力
- ・自己抑制力：自分の感情や行動をコントロールできる力
- ・目標への情熱：目標達成に向かうための情熱や意欲

○他者との協働：他者と協働するための力

- ・社交性：他者と友好関係を結べる力
- ・敬意：他者を敬うことのできる力
- ・思いやり：他者を共感的に慮ることのできる力

○情動の制御：自分の感情をポジティブにコントロールする力

- ・自尊心：自分自身を肯定的に見つめられる力
- ・楽観性：様々なことを楽観的に見つめられる力
- ・自信：自分の資質や能力を信じることができる力

【「非認知能力が子どもを伸ばす」中山芳一著（東京書籍）

OECD提唱の「社会情動的スキル」をもとに筆者が整理した非認知能力を構成する要素】

※これらの力は、非認知的であるために明確な基準に基づき難しいので、限定されるものではありません。

OECD（経済協力開発機構）が「社会情動的スキル（＝非認知能力）」を提唱（2015年）し、さらに国際機関や海外の教育学研究においても、非認知能力の重要性が提起されるなど、「非認知能力」に世界的な注目が集まっています。

日本においても、保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改訂（2018年施行）され、幼児教育でも非認知能力を育てることが重要視されています。これまでから保育5領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）の充実により、早くから非認知能力を獲得・向上するための取組がなされており、この改定・改訂によって幼児教育における非認知能力の育成が一層重視されることとなりました。

非認知能力を育むうえでは、それぞれの発達段階に応じた大人の適切な支援が必要となり、特に乳幼児期に人としての土台となる「自己肯定感」をしっかり育てることが重要といえます。

3 彦根教育 学びの提言「ひこねっこ こころそだての6か条」の内容について

大人の考え方や言動等は、子どもの非認知能力を育てるための重要な環境になることから、学びの提言プラスでは、子どもたちへのメッセージとともに周りの大人へのメッセージを示しています。

構成は、「ひこねっこ 学びの6か条」と同様、彦根の偉人である井伊直弼公の名前をもとに子どもたちへのメッセージとして「折り句」を創作しました。その下段には、大人が子どもに関わるうえで大切にしたいことや大人からの働きかけ等を表しています。

以下に、それらについて簡潔にまとめました。皆様の実践等の一助になれば幸いです。

★非認知能力（能力と構成要素）

- A 目標の達成 ①忍耐力 ②自己抑制力 ③目標への情熱
 B 他者との協働 ④社交性 ⑤敬意 ⑥思いやり
 C 情動の制御 ⑦自尊心 ⑧楽観性 ⑨自信

	子どもたちへのメッセージ	力	★大人への啓発メッセージ ○解説・願い
い	いいんだよ ありのままで！ <自己肯定感・自信>	C ⑦ ⑨	★子どもは、大人の温かい関わりに安心や信頼を感じます。話をじっくり聞くこと、ありのままを認めることが大切です。
	○ 子どもにとって、自分の気持ちを分かってくれる！共感してくれる！と思える人は、信頼できる人です。また、子どもは、自分の意思を大人に受け入れてもらえる中で、「自分はここに存在していい」と思えるようになり、その経験によって他者の意思を受け入れられるようになると言われていました。 子どもの話を聴くときは、途中で口をはさんだり否定したりせずに、まず子どもの気持ちに共感し、思いを受け止めましょう。「分かってもらえた!」と大人への		

	<p>信頼が高まると、助言なども素直に受け入れられるようになります。時には、「いいね!」「OK!」などと短い言葉で、時には子どもに具体的に語りかけて、時にはアイコンタクトやスキンシップなどで、「あなたを見てるよ!認めているよ!」というメッセージを伝えることも心がけたいことです。</p>	
い	<p>一歩ふみだし やってみよう! <楽観性></p>	<p>C ⑧</p> <p>★「まず、やってみよう!」「なんとかなるよ!」と応援しましょう。小さな成功体験や失敗から学び経験の積み重ねが、子どもの力を伸ばします。</p>
	<p>○子どもが、周りの評価などを気にして一歩が踏み出せない場合、そばにいる大人がその気持ちに寄り添いながら、状況に合った前向きな声かけをし、笑顔で背中を押すことも必要です。笑顔は一緒にいる人の表情や態度を和らげます。その後の子どもの行動を見届けて、頑張った勇気をほめながら、自信が持てるようにしましょう。大事なことは失敗しないことではなく、失敗してもくじけずに前を向き、失敗から立ち直る体験を積むことです。体験を通して、気づきや発見をしたり、「次はこうしよう」と考えたりすることを積み重ねていけば、日常の様々な体験から学び続けることができる力が育っていくと考えます。</p>	
な	<p>なぜ?どうして?は 学びのチャンス☆ <好奇心・探究心></p>	<p>A ③</p> <p>★子どもの疑問に寄り添い、「～したい!」という気持ちを大事にして、探究心をはぐくみましょう。</p>
	<p>○子どもが「どうして～?」などと疑問に思うことを尋ねた際、一緒に会話を楽しんだり、一緒に考えたり、答えを見つけるプロセスを示したりすることで、子どもの好奇心が育っていきます。興味・関心のあることをさらに探っていこうとする「探究心」は、思考力や観察力の土台となる力といえます。</p> <p>大人がなかなか時間を割くことができない場合もあるかもしれませんが、「探究心」を育てるために、特に幼児期において子どもの疑問の気持ちに伝える触れ合いを大事にしたいものです。</p>	
お	<p>思いやりの心で つながろう! <思いやり、社交性 敬意></p>	<p>B ④ ⑤ ⑥</p> <p>★「自分なら・・・」「自分がされたら・・・」と一緒に考えながら、相手の気持ちを思いやる大切さを、子どもの心に届けましょう。</p>
	<p>○SNS（ソーシャルネットサービス）などの間接的なコミュニケーションツールを通じて、人と交流することが増えていますが、日頃から、家庭や地域で何気ない会話をしたり、大人が率先して挨拶したりすることを心がけ、心の通ったつながりを大切にしたいものです。また、様々な出来事を自分事として考えさせたり、大人からたくさんの優しさを子どもに届けたりすることで、子どもが相手の気持ちを察することができるようになり、思いやりの心が育まれていくと思います。</p>	
す	<p>少しのがまん</p>	<p>A</p> <p>★目標達成のために、一緒に「計画をたてる」「ル</p>

	自分のために☆ <自己抑制力、忍耐力>	① ②	ールを決める」などして、時には我慢が必要なことに気づかせながら、自分で判断し行動できる力を育てましょう。
○目標に向けて取り組む中で、ネットやゲームなどの誘惑に負けてしまい、やるべきことが後回しになってしまったり、自分の主張ばかりが先立ち、周りとの協調することが難しくなってしまうことがあります。そんな時、大人が「～はだめ」「～しなさい」というように禁止と命令の指示ばかり出していると、自分で考えて行動しなくなります。一緒に計画を立てて先の見通しを持たせたり、一緒にルールを決めてしっかり見届けたり、今どのようにするのがよいか話し合ったりしましょう。そうして、時には我慢も必要なことに気付かせながら、自分の気持ちをコントロールして行動できる力を育てたいものです。			
け	元気にチャレンジ 夢に向かって☆ <目標への情熱、挑戦>	A ③	★結果のみに注目したり他者と比べたりするのはなく、子どものがんばりや成長をほめて励ますことが、次のやる気につながります。
○ほめられ励まされたときに感じる「嬉しい！」という気持ちが、子どもの次のやる気につながります。ほめるときは、些細なことも後回しにせずに、すぐにその場で伝えましょう。その際に、結果や成果ばかりをほめたり他の子と比べたりすると、「良い結果をださなくては…」「どうせ…」などとプレッシャーや劣等感を感じてしまいます。頑張った過程やチャレンジしようと思った気持ち、前より成長したことなどをしっかり認めてほめることで、子どもは結果が全てではないことを学び、たとえ失敗しても「次は頑張ろう」と前向きにとらえられるようになります。「子どもは努力を認められて育つと、目標を持つようになる（ドロシー・ロー・ノルト）」という言葉もあります。			